

東日本大震災により県外避難してきた子どもおよび
家族へのサポート活動について：
活動に参加した保護者の評価から

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-06-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小林, 朋子, 菅野, 文彦, 江口, 昌克 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00007333

東日本大震災により県外避難してきた子どもおよび家族への サポート活動について

－活動に参加した保護者の評価から－

A Support Group for Children and Their Families Who Moved to Other Prefectures as Refugees of the
Great East Japan Earthquake

小林朋子* 菅野文彦* 江口昌克**

Tomoko KOBAYASHI, Fumihiko SUGANO and Masakatsu EGUCHI

（平成24年10月4日受理）

We created a support group in order to ameliorate the negative feelings of children and their families who moved to other prefectures as refugees of the Great East Japan Earthquake. In the present study, we investigated parents' evaluations of the support group by using a questionnaire survey; the support groups ran from May 2011 to March 2012. The results indicate that the support group was a relaxing and fun place for both children and parents, who could talk about their experiences in a form of exchange with evacuees from outside their own prefectures. Overall, the support group was a place where uneasiness was decreased. Therefore, this support group functioned well for children and parents as a place where negative feelings could be ameliorated.

I. はじめに

災害後の中長期的な子どもの心身の変化に関しては、災害直後にPost Traumatic Stress Disorders（以下、PTSDと略す）の症状が認められるものもあるが、多くはある時間を経過してから認められることや、災害の影響は短くても数年は持続することが指摘されている（山崎ら,1996）。子どもに関する影響については多くの報告がなされている。例えば、幼い子どもでも親の苦悩に対する鋭い感受性を持っており、自分の体験を話すことが親を傷つけると考えているために話そうとせず、そのためPTSDの診断が遅れてしまう可能性が高いことが指摘されている（Yule & Williams,1990）。山崎ら（1995）は、子どもは災害の体験を誰にも話さず、家族・教師・友人からの援助を受ける機会を持たずに一人で耐え忍んでいることが多いとも述べている。また多くの子どもたちに災害から立ち直ろうとする姿勢がみられるものの、不安や緊張、身体的不調、社会生活や家庭生活の悩みなど、さまざまな問題を抱えている子どもが多く、災害の長期的な悪影響が明らかにされている（藤森,1997; 藤森,2000）。

また、子どもを支える重要な立場にある保護者もある意味、被災者であり、災害による影響も指摘されている。例えば、斉藤・西田（2001）は、阪神淡路大震災の5年後に保護者への影

*教育学部学校教育講座

**人文社会科学研究科

響は、PTSD傾向該当者は2.1%であったが、再体験が6割以上、生理的過緊張でも20%弱が該当した。そのため、保護者にも震災という心的外傷が長期にわたって影響を与え続けていることが明らかにされている。子どもの保護者の養育態度の認知とPTSD傾向について調べた研究（西村ら, 1999）では、PTSD群では保護者からの「愛情」を感じるといった養育態度の認知が低く、逆に「干渉」ではPTSD群の方が優位に高いことがわかった。つまり、震災で受けた物理的な影響よりも、保護者の養育態度に影響を受ける傾向があることが指摘されており、子どものケアには保護者のサポートも非常に重要な要素であることがわかる。

2011年3月11日に東北地方を中心に発生した東日本大震災では、多くの人たちが被災地から全国各地に避難した。このように、災害により居住地以外の都道府県に避難することを本稿では「県外避難」と定義する。この県外避難に関しては、辻（2007）は震災の影響で転校した被災者からの話として、本来暮らしていた場所が震災のために大きな被害を受け、それに対しても非常にショックを受けたが、震災の被害が全くない疎開先の場所との大きな違いにもショックを受け、辛い体験をしたことを報告している。田並（2010）は、阪神淡路大震災により県外避難した人を対象とし15年後の生活の状況に関する調査を行っている。その結果、被災しなかった人、さらに県外に避難しなかった人々に比べて、県外避難者は苦しい生活を余儀なくされていたと指摘している。さらに藤森・大和田（2004）は、災害からの月日が経つほど、被災者と周囲の意識のズレは大きくなり、社会からの孤立感を一層強く感じる人々も多く、長期的な心理的支援の取り組みが必要であると述べている。

県外避難を余儀なくされた子どもたちへの影響については、Raphael（1986）が、「住居の喪失、家族のしきたりの崩壊、親・友達・学校・親しい近隣・環境との離別、おもちゃなど大切にしていた物の喪失、なじみのない収容施設や環境、これらはすべて被災後の時期の子どもたちにとってのストレス要因になるだろう。これらの体験が立ち退きや臨時の避難場所での生活によって長びいたり、とりわけ混乱が繰り返され家庭生活と学校生活を変える転住が繰り返される場合には、子どもへの影響は本格的なものになるだろう。このような状況でしばしば重要な可変要因になるのは、親の側の反応の仕方と、親がどの程度まで子どもを安心させたり子どもの情緒的な反応に対処できるかである。」と述べている。このことから、被災地でのケアだけでなく、県外避難をした子どもたち、そして保護者が、新しい環境で必要な支援を受けながら安心して暮らせるようその生活を支えていくことも非常に重要であることがわかる。

東日本大震災により県外避難を余儀なくされた人たちへの支援としては、原発事故により県外避難をした住民に対して、避難所での生活・法律・こころの相談などを行った支援活動（猪股, 2011）、都内のホテルに避難した子どもたちに対する学習支援活動（酒井, 2011）、県外避難所での子どもたちの遊び場を開設したり、学習支援コーナーを設けたり、養育相談などを行った活動（金谷, 2011）、神戸に避難した人たちをサポートする「暮らしサポート隊」の活動（石東, 2011）などの報告がある。このように、県外避難をしてきた人たちを支えるための様々な活動が、非被災地で行われてきていることがわかる。また、大学が中心となった活動は、九州大学が中心となり、福岡に避難してきた子どもや大人を対象として“安心して、ゆっくり、リラックス”できる時間を提供することを目的とした「ほっとひろば九大」の活動が報告されている（松崎, 2011）。

静岡大学教育学部および人文学部も、被災地から静岡県内に避難してきた子どもたちや家族が「ほっとできる場所」を提供することを目的とし、2011年5月からレクレーションを中心と

したサポート活動（通称アナナス）を実施した。本研究では、2011年5月から2012年3月までの活動内容や、その活動に対する参加した保護者からの評価を基に、災害による県外避難の子どもや家族への支援について考察する。

Ⅱ. 活動の概要

1. 活動期間

2011年5月から毎月1回日曜日に、13時から15時の2時間で行った。

2. 活動内容

活動は、基本的にはレクリエーションを中心とした子どもグループと、被災や静岡での生活体験を語り合う保護者グループに分かれて行った。活動内容によっては、途中から子どもたちと一緒に活動することとした。

活動内容は、季節感を大事にし、かつ子どもの状況に応じて、個別で自由に活動できるものから、集団で一緒に活動できるものを取り入れた（表1）。

表1 アナナス活動実施日と活動内容（子どもグループ）

	実施日	活動内容
第1回	5月15日	屋内レクリエーション
第2回	6月19日	屋外レクリエーション（野球・なわとび）
第3回	7月10日	七夕祭
第4回	8月28日	バーベキュー、サンクスギビングランチ
第5回	9月25日	フィールドビンゴ
第6回	10月23日	ハロウィンパーティー
第7回	11月23日	工作（スノードームづくり）
第8回	12月25日	クリスマスパーティー
第9回	1月22日	音楽鑑賞および演奏
第10回	2月26日	屋外レクリエーション（フリスビー）
第11回	3月18日	屋内レクリエーション

3. 対象者

東日本大震災の被災地から静岡県内に避難してきた子どもとその家族を対象とした。2011年5月から2012年3月までの11回の活動に、保護者36名（実13名）、子ども61名（実21名）が参加した（表2）。

表2 参加家族数の内訳

	延人数（人）	実人数（人）
保護者	36	13
幼児	18	5
小学生	41	14
中学生	2	2

4. スタッフ

学生スタッフとして、教育学部の学生57名（実8名）、および人文学部・人文科学研究科の学

生52名（実12名）がスタッフとして参加した。学生スタッフは子どもグループのスタッフとして、臨床心理士の専門指導のもとで関わった。さらに、静岡県臨床心理士会に所属する臨床心理士87名（実14名）が参加した。臨床心理士は、子どもグループでの学生スタッフの関わりについて専門的指導を行ったり、保護者グループのファシリテーターとして活動に参加してもらった。また、大学教員スタッフとして、教育学部および人文学部43名（実6名）が参加した（表3）。スタッフとして参加したいという希望者が多かったが、参加者の人数とのバランスや、いつも同じ顔のスタッフが待っているという安心感が大事と考え、スタッフはある程度の人数で固定したメンバーで行った。

表3 参加スタッフの内訳

	延人数（人）	実人数（人）
臨床心理士	87	14
大学教員（人文学部・教育学部）	43	6
教育学部学生	57	8
人文学部学生	5	2
人文社会科学研究院院生	47	10

5. 場所

活動は、静岡大学教育学部附属教育実践総合センターで行った。

6. 広報

毎月の案内は、保護者向けチラシおよび子ども向けチラシを作成し、県内のすべての教育委員会にメールで配信し、県外避難をしてきた子どもが在籍している学校に送付してもらうよう依頼した。また保護者の許可を頂いた上で、県内のマスコミにも取材をしてもらい、アナナスを広く広報した。

Ⅲ. 活動に関する評価・感想

1. 方法

アナナスに2回以上参加したことのある8家族を対象とし、2012年3月に郵送法により調査用紙を送り回答をお願いしたところ6家族からの回答を得た（回収率は75%）。調査内容は、「アナナスからの連絡や当日の様子について（5項目）」「お子様の様子について（5項目）」「保護者様にとってどのような点がよかったか（6項目）」については、「あてはまらない」から「あてはまる」までの4件法で回答を求めた。

さらに、「お子様にとって参加してよかったなと思うことやアナナスに参加して変化したこと」「保護者様にとって参加してよかったなと思うこと」「静岡での生活でもし困っていること、不安に感じていること、支援があればいいなと思っていること」「アナナスでやってほしい活動や内容」「感想やご意見」については、自由記述で回答を求めた。

2. 結果

(1) 回答者の内訳

性別は、女性6名で、年齢は20代1名、30代3名、40代2名であった。

(2) アナナスからの連絡や当日の様子に関する評価

「あてはまる」と「どちらかといえばあてはまる」に回答した割合は、「学校からちらし（案内）は毎月届いていた」83.4%、「自宅から静大（会場）までの交通費は負担であった」33.4%、「会場の場所はわかりやすかった」83.3%、「MAILやFAXなど申し込み方法はわかりやすかった」および「当日のスタッフの対応は親切だった」では100%の評価を得た（図1）。スタッフの対応や申し込み方法のわかりやすさなどで高い評価を得たが、会場までの交通費については一部の家族にとっては負担であったことが明らかになった。

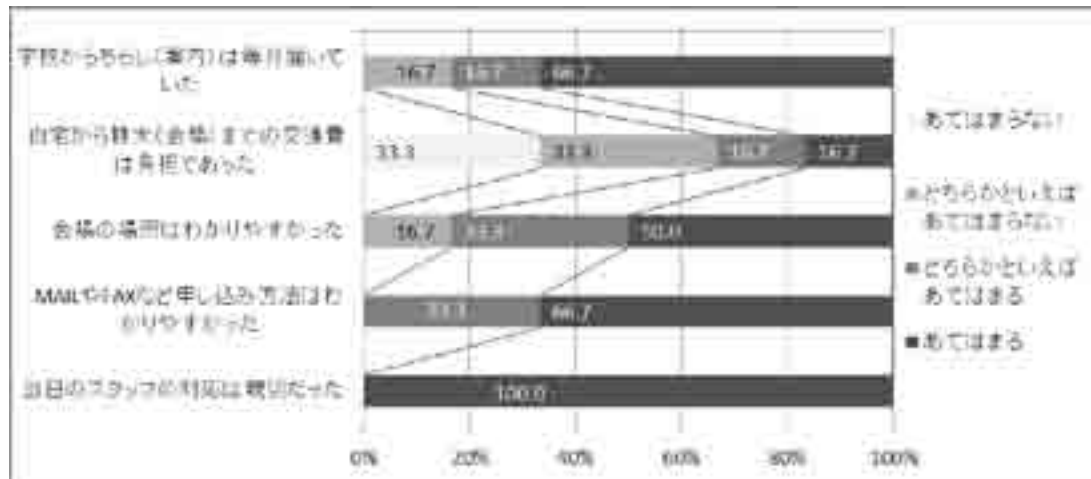


図1 アナナスからの連絡や当日の様子に関する評価

(3) 子どもの様子について

アナナスでの子ども様子や、普段の生活の中でアナナスの話題があがっているかどうかについて尋ねた項目について、「あてはまる」と「どちらかといえばあてはまる」に回答した割合は、「アナナスではのびのびとしていた」「アナナスでは笑顔であった」「アナナスではよくしゃべっていた」「家でアナナスの話をしていた」では100%であった。一方で、「アナナスでは落ち着かなくなっていた」では0%であり、非常に高い評価を得た（図2）。表4の自由記述を見てみると、参加した子どもたちは学生スタッフと過ごす時間をととても楽しんでいたとの記述が多く、子どもたちにとってアナナスがのびのびと笑顔で過ごせる場になっていたことが示された。

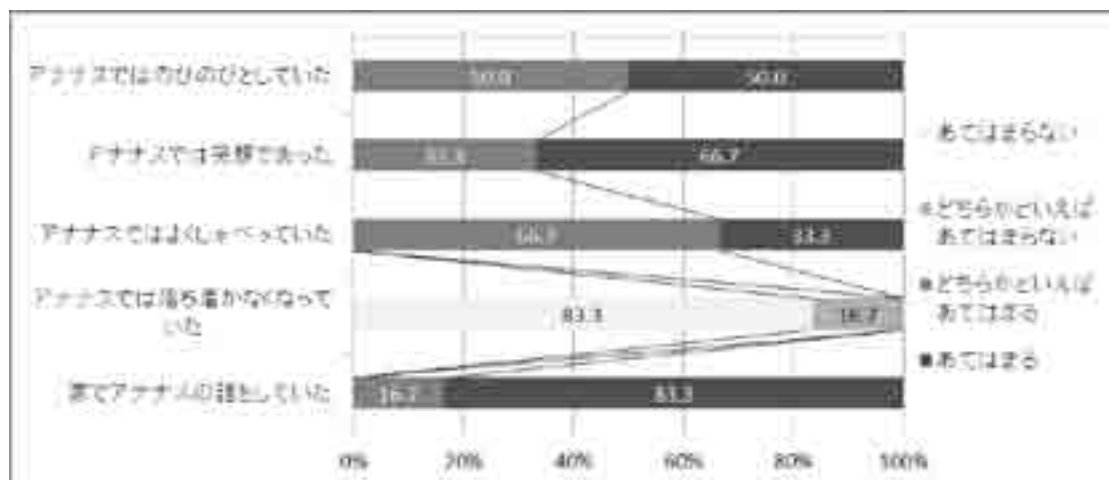


図2 子どもの様子について

表4 「子どもにとって参加してよかったなと思うこと」「アナナスに参加して変化したこと」に対する自由記述

月1回、静岡市へ行く事が私たち家族のイベントになりました。でかけることで、心が少し解放された気分になりました。毎回違った遊びを考えていただき、子どもたちはアナナスをとても楽しみにしていました。
お兄さんお姉さんと接することにより、色々な経験をすることができ、笑顔で過ごすことができました。東北のお友達とお会いできました。
子どもも大学生の方とふれあえたことは良かったです。
年上のお姉さん・お兄さんとふれあえたこと、そして、その方々と次会えるのを楽しみにしていました。
落ち込んでばかりいて、最初はアナナスも行きたくないと言っていたのですが、初回の参加でとても楽しい思いをしたらしく、とても明るくなりました(2,3日で元に戻ってしまいました)。自分と同じように避難している子と過ごすのは気を遣うことなく、思いきり遊べたようです。アナナスで遊んでくれたお兄さん・お姉さんの話もよくしていました。
見守ってくれている人達がいる！というのを子どもながらにわかったようで、安定してきました。

(4) 保護者にとっての利点

保護者の方にとってアナナスに参加したことによる利点を尋ねた項目について、「あてはまる」と「どちらかといえばあてはまる」に回答した割合は、「普段話ができない避難生活についての話ができた」「役立つアドバイスが得られた」「ほっとした時間が過ごせた」「元気がで

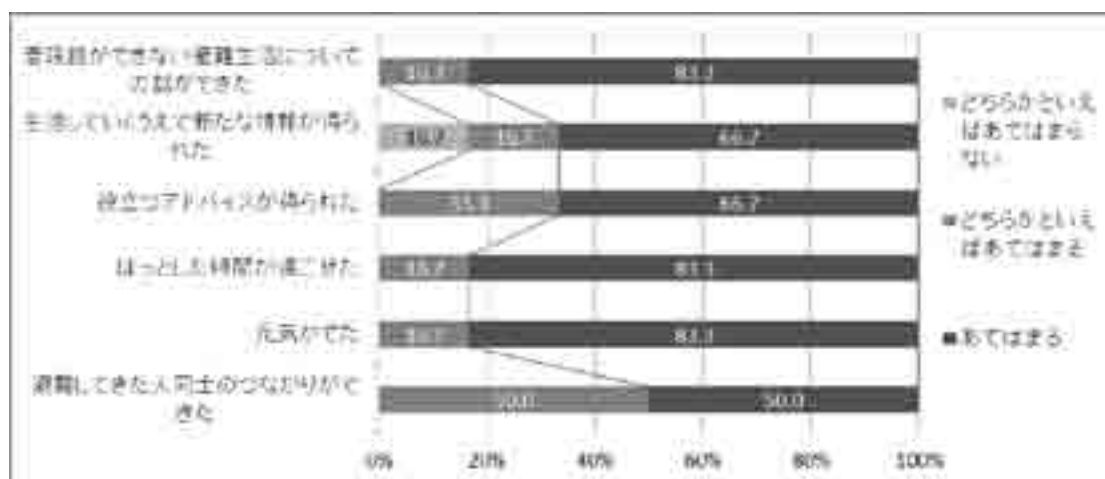


図3 保護者にとって利点に関する評価

表5 「保護者にとって参加してよかったなと思うこと」の自由記述

避難者の交流や意見を言ったり、聞けて良かったです。大学のみな様が耳をかたむけてくれてうれしかったです。
東北の方と交流の場になり、母親として他の方の意見を聞くことができたことは本当に心強く、嬉しかったです。子ども達の笑顔を見ることができました。学生の方々の純粋な優しさが嬉しく、心があたたかくなりました。
F県内の人達と話が出来たことがすごく良かったです。
普段できない内容の会話が出来たことが良かったです。そして、私もがんばろうとゆう気になりました。
同じ体験をした人と話をするだけで気持ちが晴れました。県外避難の場合、被災していない人達の中で生活するので、孤独感が強かったです。共通の話題や地元ネタで盛り上がることでできて楽しかったです。
親にも言えなかった弱音を初めて言えたこと。

た」および「避難してきた人同士のつながりができた」では100%であった。「生活していくうえで新たな情報が得られた」でも83.4%であり、保護者にとっても非常に高い評価を得た。また表5では、県外避難をしてきた人同士の横のつながりがもてたことにより、普段話ができないことを話せたり、また様々な情報を得ることもできたという利点をあげられていた。さらに、子どもが親に見せていない一面をアナナスで出せたこともよかったと評価した保護者もいたことから、子どもだけでなく保護者にとってもアナナスがほっとできる場として機能していたことが明らかになった。

(5)生活支援に関するニーズについて

「静岡での生活でもし困っていること、不安に感じていること、支援があればいいなと思っていること」としてあげられたのは、子どもの学習支援や、自宅に近い身近なところでの支援があげられていた（表6）。

表6 「静岡での生活でもし困っていること、不安に感じていること、支援があればいいなと思っていること」についての自由記述

アナナスのような、参加しやすい活動があって誘っていただけて良かったです。私たちは、知り合いが静岡にいなかったで近所や子どもの友達の親をたよりました。お互い、あゆみよりの気持ちをもちたいといけなですね。
この先がどのようになっていくのか不安があります。子どもの学力の差を感じています。学力（勉強）のサポートがあるとありがたいです。アナナスの時間をとても楽しみにしています。
アナナスでの活動には毎回参加したいと思っていましたが、様々な予定が重なり、2回しか行けませんでした。少し遠いこともあり…。もう少し近くで、同じような活動をしている所などあれば参加しやすいのかなあ…と思います。
物資の支援は十分だったので大変助かりました。学校に行く子どもは、地元の子にすぐなじみますが、大人はなかなかつながりを作ることができず、さみしかったです。私は実家に避難していたので、知らない土地ではありませんが、早いうちから外とのつながりが持てれば良かったと思います。

(6)アナナスでやってほしい活動や内容

アナナスでやってほしい内容としてあげられたのは、主に2011年度にアナナスで実施した内容が多く、子どもたちにとって「またやってみたい」と思う内容であったことがわかった。また具体的な内容ではなく、アナナスで感じた「あったかくて、おもしろい会」というコンセプトを大事にしてほしいという要望もあげられた（表7）。

表7 アナナスでやってほしい活動や内容

夏のバーベキューたのしかったです。作品をつくること。
理科の実験 百人一首 なわとび 野菜作り
また、フィールドビンゴがやりたいそうです。
来年度も活動して下さるとのこと、とてもありがたいです。
今までのような、あったかくて、おもしろい会だったら最高です。

(7)感想

保護者からの感想から、本活動で被災体験を話すことができたことや、避難先で孤立しがちであったが、県外避難してきた人同士の交流ができたことで不安が低減され元気づけられたことが共通して述べられていた。また、子どもたちも活動を非常に楽しみにしていたこともあげ

られていた（表8）。

表8 「感想やご意見」についての自由記述

アナナスに参加したことで、被災経験を話すことができました。そのおかげで、少しずつ避難した地域の方々とコミュニケーションがとれるようになったと思います。私たちが話せば聞いてくれる人がいるんだと思いました。被災した方々は、心を開いてたすけをもとめないと支援してくれる方も、どうしてよいのか分からないと思います。参加させていただいた経験は、今後、私が支援する立場になった時、役に立ちそうです。一年間ありがとうございました。

毎月子ども達は、大学生のお兄さん、お姉さんとの時間をとても楽しみにしております。普段はなかなか接する機会がない大学生から色々な事を教わり、親から少し離れた時間は刺激があるようです。今ではこの日を心待ちにし、何をやるのかなあ？と話しています。孤立しがちな避難生活ですが、東北の方との交流は情報交換の場となり、不安な気持ちも解消でき、前向きになれる場です。親子共に笑顔が増えました。

とても元気づけられました。静岡に来たばかりの頃は、土地もわからず、知り合いもほとんどいなく不安でしたが、東北の方々とアナナスのみなさんに会えて嬉しかったです。

カウンセリング的なことや重い話がなかったので、気軽に参加できました。

こういう機会を与えて下さり、心から感謝して居ります。先生方のお言葉で、どれだけすくわれたかわかりません。

IV. まとめ

今回の活動は、県外避難者にとって「ホッと安心できて、話しやすい雰囲気」であったことや、避難者同士の交流の場としても機能したと考えられる。田並（2010）は、阪神淡路大震災により県外避難した人が避難先の地域への愛着が感じられず、約半数の人は近所つきあいが少なかったことを指摘している。こうしたことから、避難先で県外避難者同士の交流、そして避難先の新しい人たちとの交流の場としても、この活動が地域のリソースとして機能できたと考えられる。また、県外避難者は、故郷（被災地）を捨てたことへの罪悪感から、被災地に残る被災者に後ろめたさを感じ、被災地からの情報を閉ざし、自らを孤立させ、孤独感と不安も持つことが指摘されている（田中，2011）。田並（2010）は、「被災地の外に出た人は、周囲と被災体験を共有することができずに胸の内にいろんな思いをためこんでいる。被災地を離れ移転した先の地域の人と言った何気ない言葉に傷ついたという人も多い」と述べている。このことから、本活動の中で安心して自らの被災体験を話せたことや、交流を通して避難先で新しい人間関係が作られていくことにより不安が低減されたことも大きな意味があった。こうした県外避難者のためのホッとできる居場所作りが、非被災地において非常に重要であることが本活動からも示すことができたと言える。

また、こうした居場所づくりを行っていく一方で、学習支援という具体的なニーズもあげられた。田中（2011）は、被災者の抱える問題は時間の経過とともに移り変わり、状況に応じて多様な様相を見せる。そして支援者の活動が求めるものと異なる場合があることがあり、被災者のニーズと支援者の支援欲求とのズレをうまく調整することが必要であると述べている。例えば、中学生であれば、避難先で高校への進路をどうするかを決定せざるを得ない状況にもなるだろう。そのため、居場所としての活動を基盤とし、中長期的には子どもたちの発達段階に応じた具体的な支援も行っていく必要があると考えられる。

本活動が参加者から高い評価を得た一方で、参加家族の人数は伸びなかった。毎回の活動で

は、各教育委員会へのメール配信を通して、該当する家族への広報を行った。しかし、学齢期に達していない子どもを持つ家庭への広報ができなかったことや、教育委員会、学校と経て家庭に案内がいく間に、期日が過ぎてしまっていたという保護者からの指摘もあった。参加者が少数にとどまってしまったという点は、酒井（2011）の活動でも同様であり、ポスター作成や時間帯変更などを行ったが効果が上がらなかったと述べており、県外避難者への支援において共通の課題となっているとも考えられる。田並（2010）は、阪神淡路大震災による県外避難者を対象とした調査で、県外避難者の交流活動に関する情報を約3割の人が「わからない」と回答しており、避難者への情報伝達に関する問題を指摘している。その一方で、県外避難者が避難先では被災者であることを隠したいという気持ちになることや、そのため必要な支援を受ける機会が失われることに繋がることも指摘されている（田中, 2011）。このことから、多くの子どもたちや保護者の参加を促すために、こうした活動の広報についても関係機関や報道各社など多方面の協力を得ながら、根気強く継続的に行っていく必要があるだろう。

謝辞

本活動にご協力頂きました静岡県教育委員会、静岡市教育委員会、浜松市教育委員会に心より感謝申し上げます。また、活動を支えて下さった静岡県臨床心理士会の会員および被災者支援本部メンバー、ならびに教育学部の教職員の皆様、学生スタッフなど多くの皆様にご協力、ご支援を頂きました。これらの皆様だけでなく、アナナスに参加して下さった子どもたちやそのご家族にも、この場をお借りして感謝申し上げます。なお、この活動は、静岡大学教育学部・人文学部の学部活性化経費および教育学部親和会、そしてNHK 歳末助け合い募金により運営させて頂きました。

引用文献

- 藤森和美（1997）. 災害が子どもに及ぼす影響, 教育と医学, 45, 45-53.
- 藤森和美（2000）. 災害後子どもの心のケア、小児科臨床（増刊号）, 53, 76-80.
- 藤森和美・大和田喜美（2004）. 被災した子どもたちの心理的問題とその支援－日本における災害支援の歴史－、聖マリアンナ医学研究誌, 4 (79), 15-23.
- 猪股正（2011）. 県外避難者支援と専門家・市民・行政の連携, 法学セミナー, 56(8,9), 54-55.
- 金谷京子（2011）. 原発事故避難の子どもたちを支援して、発達, 32(128), 61-65.
- 松崎佳子（2011）. 被災地からの転入者への支援, 臨床心理学, 11(4), 577.
- McFarlane, A.C. & Raohael, B.(1984). Ash Wednesday: the effect of a fire. *Aust. N.Z. Journal of Psychiatry*, 18, 341-351.
- 西村亜希子・西田裕紀子・齊藤誠一・神藤貴昭・奥田剛・佐藤眞子・吉田圭吾・清水民子・柳原利佳子・山本智一・森田英夫・寺村忠司・坂口喜啓・田中貴尚（1999）. 阪神・淡路大震災の心理的影響に関する研究Ⅵ－第6回調査報告－, 神戸大学発達科学部研究紀要, 6(2), 15-23.
- Raphael, B. (1986). *When Disaster Strikes - How Individuals and Communities Cope with Catastrophe* -. Basic Books, New York. (ラファエル, B. 石丸正訳 (1989). 災害の襲うと

き-カタストロフィの精神医学- みすず書房)

酒井桃子 (2011). 県外避難した子どもたちに対する学習支援活動, 法学セミナー, 56(8,9), 58-59.

斉藤誠一・西田裕紀子 (2001). 阪神・淡路大震災の心理的影響に関する研究-5年後調査報告-, 神戸大学都市安全研究センター研究報告, 5, 251-257.

石東直子 (2011). 東日本大震災・暮らしサポート隊の活動報告 (その1), いい住まいいいシニアライフ: 財団ニュース (高齢者住宅財団), 105, 17-25.

田中優 (2011). 非被災地における被災者支援の社会心理学的問題, 人間関係学研究 大妻女子大学人間関係学部紀要, 13, 79-88.

田並尚恵 (2010). 阪神・淡路大震災の県外被災者の今-震災から15年, 災害復興研究, 2, 143-159.

辻尚子 (2007). 自然災害後の学校現場における子どもへのこころのケア-阪神・淡路大震災から11年経過して-, 武庫川女子大学発達臨床心理学研究所紀要, 9, 105-114.

山崎晃資・加藤由起子・吉田友子・河合健彦・成田奈津子・渥美真理子・平野浩一 (1996). 災害と子どものメンタルヘルス, 精神療法, 22(1), 3-14.

Yule, W., & Williams, R.M. (1990). Post-traumatic stress reactions in children. *Journal of Traumatic Stress*, 3, 279-295.